平成２９年１０月１４日（土）

平成２９年度須影公民館ふるさと歴史講座

須影八幡宮を探る

羽生市文化財保護審議委員

間仁田　勝

1　はじめに

須影八幡宮は、須影村の鎮守として存続してきた神社で、村民に愛されるとともに、須影地区において最も慕われている神社である。

建立時期は不明であるが、境内に「頼朝旗掛けの松」と伝承されていた樹があり、それを信じれば、その頃には存在していたこととなる。

『新編武蔵風土記稿』に「村の鎮守なり、慶安二年八月二十四日、社領十九石五斗餘を賜ふ」とある。

寛永年間(1624-44)に別当寺としての蓮華寺が建立され、それ以後、神仏混淆のなかで蓮華寺とともに一体的に存続してきた八幡宮も、明治における神仏分離令の影響により、別当寺である蓮華寺最後の住職をもって、須影八幡宮における社僧は終わり、現在に至っている。

なお、蓮華寺は、２０世住職潮元和尚を最後に、檀家寺であった東曜寺及び善光院とともに明治３年に廃寺となった。

2　八幡宮（八幡信仰）の普及

（1）八幡宮の建立

①八幡神の誕生・宇佐神宮の建立（大分県宇佐市）

「八幡」とは、船に多くの大漁旗が立てられる様を表す言葉で、宇佐地方では、この海の神を「八幡（やはた）神」と呼び崇拝していた。

西暦５２７年、筑紫国造磐井が朝廷に氾濫を起こし、宇佐国造であった宇佐氏は磐井に味方し敗れた。代わって着任したのが辛嶋氏であった。

一方、筑紫をはじめとする北九州の多くの地域では、西暦４世紀に新羅征討を行った神功皇后とその子の筑紫で誕生した誉田別尊（ほんだわけのみこと）を崇拝していた。

蘇我馬子は宇佐の支配を強化するため、大輪神社の神主であった大神比義を宇佐に送り込んだ。

和銅５年(713)、朝廷は神祇令を発し、宇佐にも国家祭祀の神社を設けることとなり、祭神を定めるに当たり、大神氏は誉田別尊を、辛嶋氏は八幡（やはた）神を、それぞれ推した。この争いに仲裁に入ったのが隠棲していた宇佐氏で、誉田別尊（後の応神天皇）を八幡（やはた）神に付与した新たな「八幡（はちまん）神」を、新たに建立された宇佐八幡宮の祭神とした。

『扶桑略己』の欽明天皇の項に「八幡大明神筑紫に顕れる。(中略)和雅名は護国霊験威身神大自在王菩薩と云う。国々所々に神明に垂迹し、初めて顕われ坐すのみと。一に云わく。八幡大菩薩は初め豊前国宇佐郡馬城岑に顕われ、其の後菱形小倉山に移ると。今の宇佐宮是なり」とあるように、祭神が八幡大菩薩と代っていった。

（２）　八幡宮の勧請

①　手向山八幡宮（奈良県奈良市）

『続日本紀』に、聖武天皇は総国分寺として東大寺を建立し、大仏を鋳造する時、八幡神の神教を受け、その神助を得て完成した。天皇は、天平勝宝元年(749)に八幡神を梨原の宮に祀ったとある。

朝廷は、九州支配に際し、宇佐氏の力を借りるとともに、東大寺建立においても力を借りたことから、聖武天皇の命により天平勝宝元年(749)、東大寺の鎮守として、宇佐八幡宮を勧請し、平城京に八幡宮を創設した。

『東大寺要録』に、「天応の初頃(781)に霊験威力神通大自在王菩薩のお告げを給わり、この神を祀る」とある。

延暦２年(788)、桓武天皇の託宣により、爾来、八幡宮の祭神は「八幡大菩薩」と呼ばれるようになった

当初は梨原宮（奈良市役所近辺）にあったが、その後の建長２年(1250)に現在の手向山の地に遷座された。

明治初年の神仏分離令により祭神の八幡神座像（国宝）は東大寺八幡殿に移され、現在は八幡大神（誉田別命、比売大神、神功皇后）を祭神としている。

②　石清水八幡宮（京都府八幡市）

平安京へ遷都後においても、平城京を守護していた手向山八幡宮に代わる平安京を守護する八幡宮として、貞観２年(860)に清和天皇の命により宇佐八幡宮を勧請し八幡大菩薩を祭る石清水八幡宮が創建された。

歴代朝廷の崇敬熱く、特に清和天皇の建立であることから清和源氏の氏神ともされた。

また、源氏の頭領である源義家が、この石清水八幡宮で元服し「八幡太郎」と名乗ったことから、武勇の神としても崇拝されるようになった。

石清水八幡宮は、平安京の裏鬼門（南西）にあたる京都府八幡市の男山上に鎮座しており、八幡大神を祭神としている。

③　鶴岡八幡宮（神奈川県鎌倉市）

康平６年(1063)に前九年の役で戦勝を祈願した石清水八幡宮を、源頼義・義家親子により鎌倉の由比郷鶴岡（材木座）に鶴岡若宮として勧請し八幡大菩薩を祀ったのが始まりである。

治承４年(1180)に兵を起こした源頼朝は、鎌倉に入ると、「祖宗を崇めんがため」と小林郷松岡の地に、その社（若宮八幡社）を遷した。

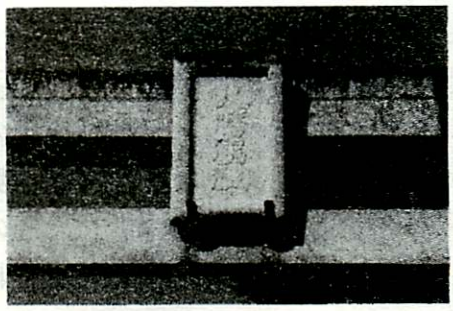
頼朝は、その後の建久２年(1191)、社殿が焼失したことから、裏山の中腹を切り開いて、本社を造営、改めて岩清水八幡宮から神霊を迎えた。

現在の祭神は、応神天皇、比売神、神功皇后となっている。

【掲額「鳩八幡」】

八幡宮の神使が鳩であることから、八幡宮には一般的に「鳩八幡」の額が掲げられていることが多い。

須影八幡宮の「一の鳥居」（明治３１年建立）の額は鳩八幡となっている。



鳩八幡の掲額

（３）八幡宮の全国への分祀

文治元年(1185)、後白河法皇は、源頼朝の代理で上洛した北条時政の圧力に屈し、源頼朝を源義経追討のための日本国惣追捕使に任命するとともに、全国の荘園・国衙領の土地のから兵糧米の徴収を認めた。

そして頼朝を日本国惣地頭に任じ、荘園・国衙領の土地の支配と、それらを知行する官人の支配権を認めた。

この権限に基づいて、頼朝は、全国の国及び荘園・国衙領に惣追捕使（後の守護）及び地頭を配置した。

配置された追捕使・地頭たちは、こぞって武神としての八幡大菩薩を鶴岡八幡宮から分祀していった。

なお、頼朝は、建久３年(1192)に征夷大将軍に任じられている。

（４）羽生市内の八幡神社（須影八幡宮は除く）

① 今泉八幡神社（祭神：誉田別命）
文禄２年(1593)に忍城主成田氏長により創建されたと伝えられる。

② 加羽ケ崎八幡神社（祭神：誉田別命）
村が開発された江戸初期に創建されたと思える。

③ 喜右衛門新田八幡神社（祭神：誉田別命）
寛永年間に新田が開かれた折に建立されたものと思える。

④ 下岩瀬八幡神社（祭神：誉田別命）
一説に、慶長５年(1600)に、入江宗六なる者が創立したとある。

⑤ 中手子林八幡神社（主神：誉田別命）
社伝では、元亀３年(1572)の創建とある。

⑥ 日野手新田八幡神社（祭神：誉田別命）
江戸中期、この村を開発した三左衛門が勧請したという。

⑦ 三田ケ谷八幡神社（祭神：誉田別命・気長足姫命）
正保２年(1645)に村を開拓した折、勧請したものと思われる。

⑧ 名八幡神社（祭神：誉田別命）
戦国期の創建か。

3　須影八幡宮の建立

（1）源頼朝旗掛けの松

かつて境内に「頼朝旗掛けの松」と伝承されていた樹があった。源頼朝が奥州征伐（文治５年）の途中、軍を休ませ、この社に戦勝を誓った折に、旗を掛けたと言われている。

この伝承を信じれば、文治５年(1189)には、神社が存在していたとともに源頼朝をこの神社に誘導した有力者がこの近在にいたものと思える。

旗掛けの松

この松は、明治３４年の資料によると、高さ３０ｍ、幹回は５ｍ４０ｃｍあったとあるが、昭和６１年(1986)、枯死したことにより惜しくも伐採されてしまった。

枯死したことにより、市文化財は指定解除となった。

現在、羽生郷土資料館に保存展示されている切り株をみると３１０年の年輪が刻まれており、江戸時代前期の延宝年間の植栽となる。一般的に松の寿命は７００～８００年と言われており、また、当時において頼朝が旗を掛けられる程の大きさがあったこと等から換算すると、伐採された樹は２代目ないしは３代目かもしれない。

（2）葛浜四郎行平

かつて、羽生市の西部地域及び加須市の一部は葛浜郷と呼ばれており、その葛浜に、平安時代末期、大河戸下総権守行方の４男である四郎行平が居し、「葛浜」を姓としたとある。葛浜四郎行平は、『吾妻鏡』によると、治承５年(1181)に他の３人の兄とともに、源頼朝に仕えたとある。

四郎行平が居したのは葛浜郷の今の神戸の地と伝わっており、その館跡と言われるところが今でも羽生市神戸の地に伝わっている。

葛浜四郎行平とは、『太田系図』によると、藤原秀郷系太田氏の子孫である太田行平の孫にあたる人物で、子の葛浜左衛門尉行高も鎌倉幕府に仕え軍功をあげている。

（3）八幡神勧請者は葛浜四郎行平か（推測の域をでないことを了承されたい）

奥州征伐(1189)の折、源頼朝を須影の古社へ誘導したのは、治承５年に頼朝に仕え、御家人として活躍していた葛浜四郎行平と思われる。

行平はそれを機に八幡大神を鶴岡八幡宮から勧請したのかもしれない。

4　須影八幡宮の変遷

（１）社領を賜う

『新編武蔵風土記稿』に「村の鎮守なり、慶安二年八月二十四日、社領十九石五斗餘を賜ふ」とある。

米１合が１食分であることから、１日３食であれば、１石は人間１人が１年間に食する量となり、１９石５斗は１９．５人分の所領となる。

かつては、神社に所属してその経済を支えた民を「神戸（かんべ）」といい、その神社に祖・庸・調を納めることにより、神社の経済が運営されていた。

中世後期、特に戦国時代となるとその社領も次第に浸食され、ついには太閤検地により没収され、代わりにいくばくかの社領を与えられることとした。

あとを受けた江戸幕府は、それを追認しつつ、新しく配分するという形で将軍の名において「社領安堵の証明書」、いわゆる朱印状を交付した。

須影八幡宮も、慶安２年(1649)に、徳川家光将軍から１９石５斗余の朱印地を賜った。

（２）神仏分離令による蓮華寺の廃寺と須影八幡宮の独立

慶應４年(1868)３月、明治新政府は神仏分離の方針を決め、権現・午頭天王などの仏教的神号を持つ神社の由緒を提出させるとともに、仏像を神体とすることを禁止し、神社からの仏像・仏具の追放を命じた。

この神仏分離令により、平安時代以来の神仏習合の伝統が破壊され、神社内の神宮寺・寺院内の鎮守神の分離独立、八幡大菩薩・熊野大権現などの習合神からの菩薩・権現号の剥奪が行われることとなった。

同年の４月には、早くも、岩清水八幡宮においては祭神を「八幡大菩薩」から「八幡大神」に変更している。(『日本全史』)

神仏混淆政策により、社職より上位に立っていた僧職に管理されていた須影八幡宮も、神社管理者となっていた別当、社僧（神社を司る僧）を廃すとの神仏分離令により、蓮華寺二十世潮元和尚を最後に社僧は廃止された。

それ以後、須影八幡宮においても、神主により神事が行われるようになり、祭神も「八幡大菩薩」から「八幡大神（誉田別命）」と変っていった。

この神仏分離令の発布は、平田篤胤の流れをくむ平田派の国学を学んだ神官たちの先導もあり、誤った解釈により、全国的に廃仏毀釈運動が広がり、多くの寺院が廃寺となるとともに、仏像・仏具・経典が失なわれていった。

須影八幡宮においても、別当寺であった蓮華寺も廃寺となってしまった。

小礒家文書によると、明治３年の時であったとある。

（３）上地令による境内地の減少

明治政府は、江戸時代に認められていた寺社領に対し、上地令を明治４年と８年の２回にわたり発布し、最低限必要な土地以外の土地を公収した。

須影八幡宮も例外ではなく、朱印地・除地・地蔵免が公収されている。

桑崎の小沢家に、明治５年６月に埼玉県に提出した八幡宮・白山社・蓮華寺・東養寺・善性院の２社３寺における跡地処分の文書『乍恐以書付奉申上候』があり、それには次の通り記されている。

・八幡社　　２町１反７畝１６歩（内上地　　４反８畝２６歩）
・蓮華寺　　４町１反９畝　７歩（内上地　３町５反３畝１７歩）
・東養寺等　２町６反２畝　２歩（内上地　　１反１畝２３歩）
・白山社　　１反３畝１０歩

これを八幡宮でみると、上地地が４反８畝２６歩、屋代義雄分が１反４畝１２歩（田）、飯野波江（八幡宮仮祠掌）分が５反７畝２８歩（田畑）、そして９反６畝１０歩（田畑）が百姓持分とされている。

ここにある屋代義雄とは、陸奥泉藩から種痘実施のため須影村に派遣された藩医で、廃藩置県後、土着したことから土地を下付されたものである。

（４）神社境内地の復帰

八幡宮の境内地は、上地されたことにより、大字須影1570番地の１反８畝１８歩（５５８坪）のみと半分以下の狭小になるとともに、神社入口部の両側の地も上地され、参道のみが残るだけとなっていた。

それを憂いた飯野波江氏は、地元要望の南側参道近辺の３筆（1569番・1571番・1572番）、併せて９畝１３歩を国から購入し、八幡宮に寄附した。

また、神社の裏の官林として上地された1568番地、６５３坪については、内務大臣及び農商務大臣に申請し、許可されている。

この４筆の編入により須影八幡宮も従来通りの敷地に戻ることとなった。

（５）神社の合祀

明治３９年８月、明治政府から、合祀によって不要になった境内地は、その合祀した村に贈与されるという「神社寺院仏堂跡地譲与に関する勅令」が発せられ、村民、特に村指導者はこぞって神社等の合祀を行っていった。

須影村も村内にある愛宕社と白山社を八幡宮に合祀していった。

しかしながら、合祀されたものの、地域住民の愛着が強く、愛宕神社は祭神・迦具土命（旧愛宕大権現）とともに旧耕地に分祀された。

これにより、白山社の土地１反３畝１０歩は村共有地となった。

5　祭神等

（1）祭神

須影八幡宮の現在の祭神は、誉田別命（ほんだわけのみこと）、菊理姫命（くくりひめのみこと）、伊弉諾命（いざなぎのみこと）、伊弉再命（いざなみのみこと）となっている。

誉田別命は八幡大菩薩が神仏分離により代わった八幡宮の祭神で人皇第１５代応神天皇のこと、菊理姫命・伊弉諾命・伊弉再命は明治３９年８月の「神社寺院仏堂跡地譲与に関する勅令」により合祀された白山神社の祭神である。

祭神・誉田別尊

また、白山神社とともに愛宕神社も合祀されたが、現在は分祀され祭神・迦具土命（旧愛宕大権現）とともに旧地にもどっている。

応神天皇は、第１４代仲哀天皇と神功皇后の間に生まれた皇子で、『日本書紀』には誉田別尊と記されている。

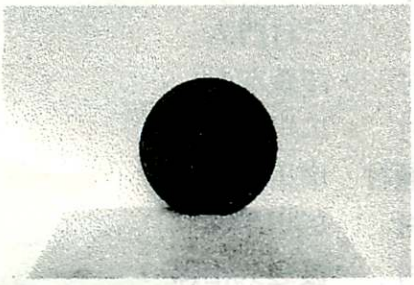
騎乗八幡神像

神功皇后が、三韓征伐を終え、筑紫に凱旋、そこで生まれたのが誉田別命で、九州から大和に帰還しようとすると母子を、皇子の異母兄の忍熊王が阻止しようと抵抗した。皇后は、武内宿禰（たけのうちすくね）の助力のもと、船を紀伊に迂回し、忍熊王を攻撃、近江の瀬田で敗死させた。

皇后は、大和の磐余（いわれ）を都とし、６９年間統治し、１００歳で死去後、誉田別命が応神天皇として即位したという。

応神天皇は、初代神武天皇及び第１０代崇神天皇とともに「神」が付くこと、九州から東征したことから事実上の初代天皇ともいう学者もいる。

（2）鏡・仏像



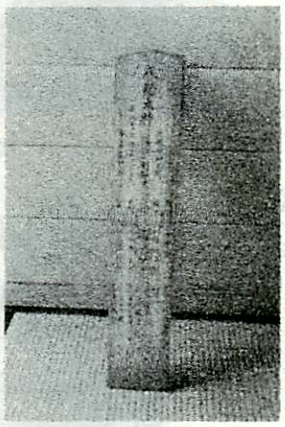
6　社殿

（1）社殿再建（安政５年）

八幡宮に、安政５年(1858)の棟札が残っている。

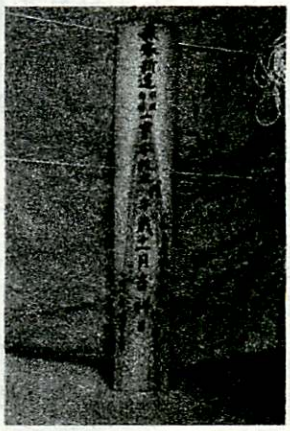
この棟札によると、拝殿は、蓮華寺十八世再住二十世潮元の大願主のもと、須影の大工棟梁清水仙松尚通、本川俣の棟司三村若狭正利・棟司三村吉左衛門正弘が造営したとある。

棟司の三村若狭正利は、文化元年(1804)に名著『諸社記』を著した三村治朝の長男として生まれ、神祇祭式立柱上棟祭事作法を伝習し其の許状を授与するとともに、「若狭」の称号も授与された名匠で、加須の龍蔵寺本堂や総願寺不動堂など多くの神社仏閣を造営している。明治２５年に８５歳で没した。



棟札（再造拝殿）

棟札（再建拝殿）



棟札（幣殿・向拝）

○棟札

八幡大神　武蔵国埼玉郡須影村鎮守
安政五戊午歳霜月吉良日
奉再造拝殿一宇

棟梁	當所大工	清水仙松
棟司	本川俣村	三村若狭正利
同	三村吉左衛門正弘	
彫刻工	上州花輪	石原恒蔵主利
	下岩瀬村	入江文治郎茂弘
木挽棟梁	當所	清水彦太郎
		三村門人
	下谷村	江森友七
	小松村	広川長吉
	上岩瀬村	増田宇之助
	小松村	広川半蔵
	北袋村	渡辺久治郎

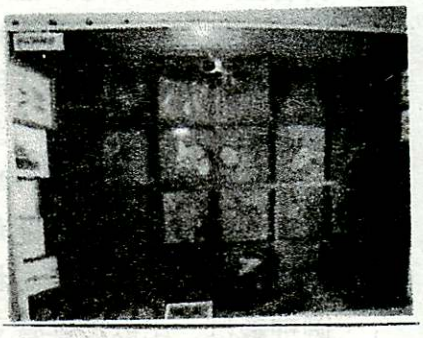
（２）社殿の天井画と壁画

① 拝殿格天井「花鳥図」

拝殿の格天井には、文久２年(1862)に、熊谷の岩田霞岳（かがく）により書かれた「花鳥図」が描かれている。

岩田霞岳は、文政１１年(1828)に熊谷宿で生まれた画家で、行田市琴平神社に明治６年に奉納された久下河岸を描いた絵馬「新川早船」など、多くの作品を残している。

明治２２年に６２歳で没している。



格天井「花鳥図」

② 壁面彫刻

本殿の壁面には、昭和４４年３月２０日に羽生市文化財（彫刻）に指定された彫刻が彫られている。

西側壁面に「七福神」、北側壁面に「神功皇后縁起三韓征伐」、東側壁面に「大蛇退治」、「地形つき」の彫刻がそれぞれ描かれている。

この見事な彫刻についても棟札に、上州花輪（みどり市）の彫物工石原恒蔵主利及び下岩瀬の彫物工入江文治郎茂弘が彫刻したと記されている。

また、拝殿正面の向拝部の龍神の彫り物の裏側にも棟札と同じ「上州三輪村石原恒蔵主利」の文字が記されている。

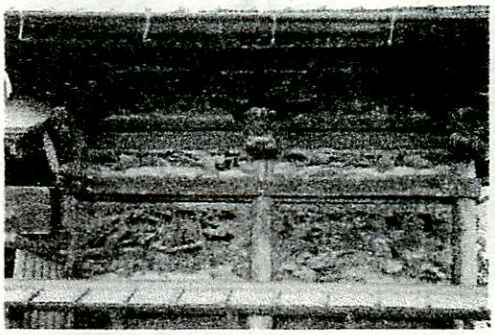
石原恒蔵主利は、聖天堂の彫物大工棟梁として一世を風靡した石原吟八郎を初代とする上州花輪村の彫刻師石原流の３代目で、文化１０年(1810)に生まれ、明治１５年に７２歳で没している。

主利の代表的作品に、三村正利の弟で、妻沼の宮大工林家の養子となった林正道が造営した聖天堂貴惣門の彫刻がある。

須影八幡宮の彫刻は、安政５年(1858)に彫像したとある。

平成２３年３月１１日の東北地方太平洋沖地震の折、壁面彫刻の１枚が落下し一部損傷したが、同年１２月１４日に修復された。

その手法は、破損した彫刻を清掃後、破損部については麦漆を用いて接合、矧ぎ線については錆漆を用いて補修、欠失部及び補修部については最低限の補彩を行い、ネジ頭が色合わせされたステンレス木工ネジで元の壁面に取り付けるとともに、落下しなかった他の５箇所の彫刻についても、同様のステンレス木工ネジで壁面に止めるというものであった。



須影八幡宮壁画

7　須影八幡宮社物（特殊なもの）

（１）御神籤（おみくじ）版木

須影八幡宮には、羽生地区では珍しい御神籤のセットが存在している。

版木は、１枚に片面３種の御神籤が両面に彫られた１７枚となっている。

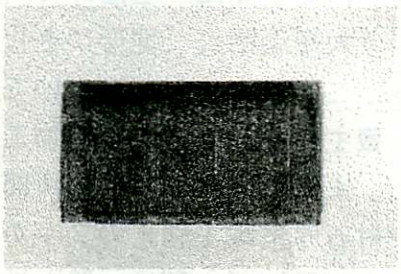
また、八幡宮の版木には、「蓮華寺再住潮元代　文久二壬戌年四月吉日作」そして、「忍行田住　今津平兵衛彫」と製作者の名が記されている。

文久３年(1862)に、蓮華寺２０世潮元の代に、忍領行田に住する彫工師今津平兵衛により制作されたことがわかる。

御神籤は、比叡山延暦寺の中興の祖である元三慈恵大師良源上人により、創始されたといわれ、慈恵大師が観音菩薩に祈念して偈文（げもん）を授かった観音籤が起源と言われている。また、元三大師は、別名「厄除け大師」として名高い。

元三大師の御神籤は、大吉・小吉・吉・半吉・末吉・末小吉・凶の７種類に分け運を占ったのに対し、須影八幡宮の御神籤は、１００枚あり、それを上記の７種類に特殊籤として４種類（凶末吉・大凶・前凶後吉・前凶後小吉）を加えた１１種類に分けている。

また、須影八幡宮には、御神籤札入れ棚、御神籤箱等の用具も一式揃っている。



八幡宮御神籤版木

（２）風刺画（漫画）

制作年代は不明だが、当時の世相を表した風刺画が２０枚ある。

その一部をここに掲載する。

8　須影八幡宮奉納絵馬

須影八幡宮は、須影村民はもとより、羽生領全域からも信心篤く、絵馬を始め多くのものが奉納されている。

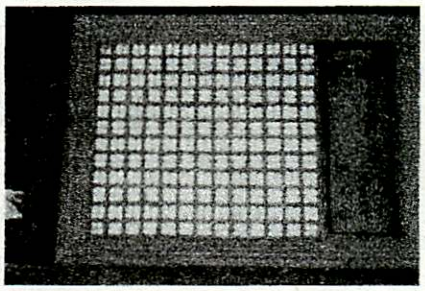
絵馬とは、祈願または報謝のために、社寺に奉納する絵の額のことで、馬または木馬を奉納する代わりに馬の絵を描いたが、次第に馬以外の画題も扱われるようになるとともに、絵師として名のある人を頼むなど、絵画の点からも貴重な絵馬も登場するようになった。

（1）繭額

商売繁盛、学問成就、五穀豊穣、子孫繁栄及び技芸上達を祈願し、奉納された絵馬である。

須影八幡宮の繭額は、明治３１年に奉納されたもので、繭玉の２個セットを１３列１２段に配している。

明治３１年(1898)に奉納された。



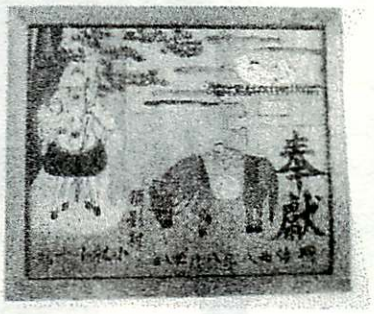
繭額

（2）源義家と須影八幡宮

合戦模様や武者伝説等、画題として取り上げやすいことから、多くの社寺において絵馬として描かれている。

この須影八幡宮の絵馬は、八幡宮所縁の源八幡太郎義家が八幡宮に立ち寄った折の姿を描いている。

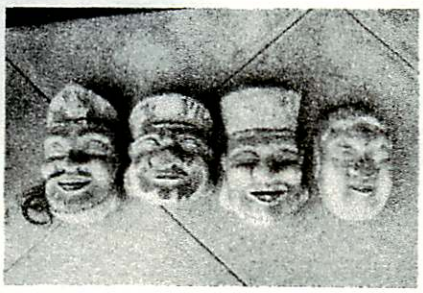
明治２８年(1895)に奉納された。

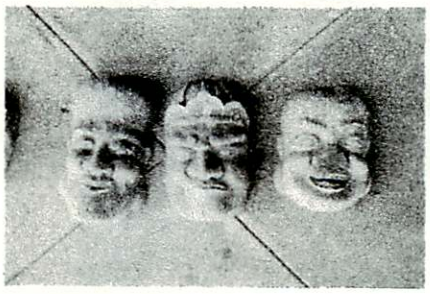


源義家と須影八幡宮

（3）七福神

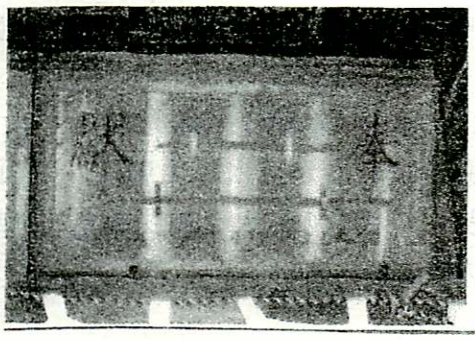
七福神の顔を彫ったものを貼り付けた額で、ここ須影八幡宮の七福神額は、はがれており、額と七福人の顔の彫像が別々になっている。

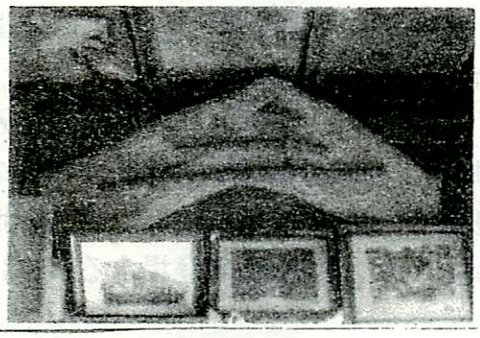




七　福　神

（4）刀剣

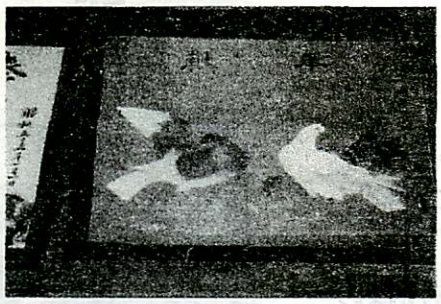




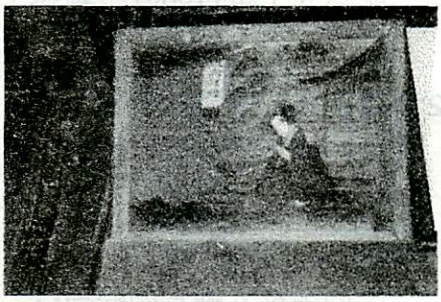
刀　剣　額

（5）その他の絵馬

祈願する姿を描き念願成就を願う参詣絵馬、幸福の象徴である鳩を描いた絵馬、伊勢講等の参拝記念の絵馬や講中において大神楽を奉納した記念として奉納された絵馬、及び「社号」の文字のみを描き社への信心を伝え祈願する絵馬等がある。

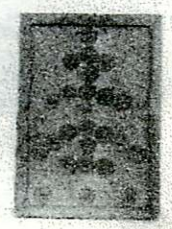


鳩絵馬



拝み

社額



9　参道施設

（1）幟・幟台・標柱

幟は、神社の位置を示す施設であり、神様を誘導する施設である。

須影八幡宮には「文久三癸亥年八月之吉」と記されている幟が保存されている。

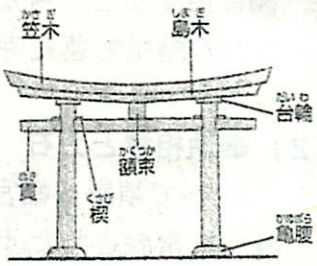
その幟を立てる台柱は、明治１６年に建柱されたと刻されている。

また、入口に建つ「八幡神社の標柱」は昭和５７年建立とある。

文久３年銘の幟

（2）鳥居・注連縄・社額

鳥居は、神社の入り口を示す門で、「通り入」（とおりい）の意と言われている。



鳥居に掲げる注連縄は、天照大神が天の岩戸を出た後、二度と入らぬよう注連縄を張った例による、いわゆる「占め縄」の意である。

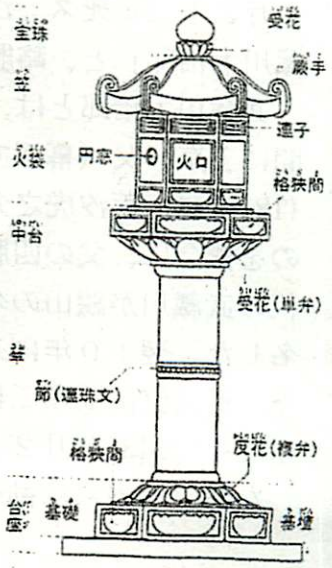
注連縄のある鳥居より内側は神聖なる神の領域ゆえ、穢れのある人（喪中の人等）は鳥居をくぐらず脇から入るとともに、下馬・下車を通例としている。

須影八幡宮には鳥居が２基あり、一の鳥居は明治３１年に、二の鳥居は平成２０年にそれぞれ建立されたとある。

一の鳥居に掲げられている「八幡神社」の社額の「八」の字は鎌倉鶴ケ岡八幡宮と同じ鳩の形を模した鳩八幡（３ページ参照）となっている。

（3）灯篭・狛犬

灯篭は神様を誘導する施設で、須影八幡宮の大灯篭は明治１６年に、小鳥居は昭和４５年設置と刻されている。

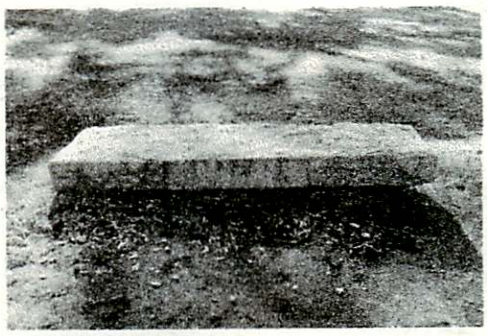


なお、参道の真ん中は神様の通り道である。

狛犬は魔除けの霊獣で、百獣の王の獅子のことで、高麗から伝来したことから、獅子が高麗犬と言われるようになったという。須影八幡宮の狛犬は「両子連れ流れ尾」と言われる型で、昭和３３年設置（石工：加須市臺群鴻）と刻されている。

１０　神社付随施設

（１）聖池橋板


橋板

神社と前池（聖池）と結んでいた石橋の橋板で、大正３年に手子堀用水路に架設したものである。新橋の架け替えに伴い不要となったことから撤去され、境内に移設、現在はベンチとして再利用されている。

かつては多くの神社に祈願淋浴のための聖池があった。

井泉鷲神社にその情景を描いた明治１５年の絵馬「祈願淋浴図」がある。

この須影八幡宮の前池が、その祈願淋浴のための聖池であったか定かではないが、神仏分離前、この須影八幡宮の前に湯屋があり、参拝の後、この湯に浴すると心身が健全になると言われ、大いに賑わっていたという。

この湯屋も蓮花寺の廃寺に伴い廃業してしまった。

（２）奉納相撲と力石

かつて須影八幡宮の毎年１０月１４・１５日に開催される秋祭りの折、境内に常設された土俵で奉納相撲が行われていた。相撲は八幡講と呼ばれ、羽生を中心とした近郷近在の力士が集まり腕を競い合った。

この奉納相撲は大正の中頃まで続けられていたという。この奉納相撲からは、江戸力士となり前頭３枚目まで昇り年寄武蔵川となった須影村出身の武蔵川大治郎がいた。旧蓮華寺墓地に墓碑がある。

墓碑の正面に「嘉永元年六月二十二日狼屋院力蔵晴雲信士霊位」と大治郎の没日と戒名が、そして右側面に「武刕埼玉郡須影村産ニテ荒潮大治郎名乗ル文政十丁亥歳武蔵川大治郎改幕乃内ニ上ル年寄組頭役勤ム嘉永元年六月二十二日死ス　江戸下谷柳之稲荷大乗寺有之　行年五十五歳　俗名武蔵川大治郎」と、略歴が記されている。

武蔵川大治郎とは、須影八幡社勧進相撲で大関を張っていたが、文化年間に上京、父（幕下で活躍）が所属していた粂川部屋に入門、文化１０年(1813)に、荒汐虎之介として初土俵を踏み、翌１１年、三段目に昇進したのを機会に、父の四股名である荒潮大治郎に改めた。文政９年(1826)、先代の武蔵川が錣山の名跡を継いだことに伴い、現役のまま年寄武蔵川を襲名した。翌１０年に入幕し、天保９年(1833)二月場所を最後に引退している。最高位は前頭三枚目であった。引退後は年寄組頭を勤めていたが、嘉永元年(1848)６月２２日に死去した。行年５５歳であった。

なお、境内には勧進相撲名残の「力石」も奉納されている。

（３）潮元師碑：故舊門弟建之

境内には、蓮華寺住職である潮元の寺子屋の碑「潮元師碑」がある。潮元の十七回忌に筆子らによって建てられた。

潮元和尚は、本名を大貫武之といい、須影村の出身で、天保５年(1834)に蓮華寺の１８世住職となり同９年(1838)退任、その後、嘉永４年(1851)に１９世心順に代わり再び住職に再就任した。

安政５年(1858)に須影八幡宮の再々建を行うとともに、八幡大菩薩の本地仏を安置してある蓮華寺阿弥陀堂を修復している。また、法務のかたわら寺子屋を開き、近隣子弟を教授した。

潮元師碑

明治元年に蓮華寺住職を２１世守心に譲り、八幡宮の東隣に隠居し、明治４年に没している。享年７３歳であった。

潮元師碑の碑文は次の通りである

「潮元師初稱恵祥後改本名姓大貫氏武之須影邑人也師年甫十二就邑之蓮花寺主潮音者受戒焉天保五年継法統為住職同九年退隠後嘉永四年因衆推薦再襲前職明治元年以頽齢辞焉同四年九月三十日病寂距生寛政十一年享寿七十三而前後在職廿有三年矣葬法嗣先塋之次師自幼好学老而不倦以法務余暇教授近隣子弟資性敦厚倹而不食嘗捐私財募有志以修理堂宇之頽壊又改築八幡社殿或賑恤邑民貧困者其他美事善行蓋不尠云今茲当其十七回忌辰於是故旧門弟等追懐徳誼弗措遂協議醵貲以建碑焉嗚呼輓今賦重歛厚民人衣食奔走是不遑当斯秋而有斯挙乃以其徳与望可想見也頃日邑人持状来請誌之予不文何敢当其仁然亦景仰師之徳望併感喜有志之慈善者也因弗辞而為之誌

明治二十歳次丁亥嘉平月

北埼玉郡長　正八位　矢野三郎　篆額

行田楊州古橋寛　撰文

北河原古鼎小林推精書」

潮元木像

（４）須影簡易水道竣工記念碑

昭和３２年７月の上新郷及び北荻島において簡易水道が完成したのに次いで、昭和３４年４月に須影簡易水道が完成、これを記念して、須影簡易水道組合により建立された碑である。

この簡易水道も羽生市水道の普及によりに統合され廃止された。

１１　境内社

（１）庚申塔

人間の体内には三尸虫、いわゆる三匹の虫がいて、庚申の夜に体内から抜け出し、天帝にその人の悪事を報告し、それにより今後の寿命が決まるという。そのため、庚申の日には、三尸虫が天上へ昇るのを阻止するため、夜通し寝ずに過ごす。

なお、庚申塔には仏教系のものと神道系のものがある。

仏教系…青面金剛（主尊）、蓮（台座）、日輪・月輪（背景）

神道系…猿田彦神（主尊）、雲（台座）、鳥居（背景）

須影八幡社境内の庚申塔は、寛政９年に建立された。

（２）産泰大神

裏妙義に産泰山(750m)があり、その頂上に産泰大神の石碑がある。

産泰神社は、前橋市下にあり、木花開耶姫命を祭神とする子授け・安産の神社である。特に利根川沿川の地域に多く分祀されている。

本庄市にある産泰神社では、毎年４月４日の祭りには、参拝者が「子供が安産で生まれますように」と願い、軽く抜ける（生まれる）ようにと、底のないヒシャクを奉納する行事が行われている。

産泰講は、子授け・安産を祈るための女衆の講で、一同に集まって飲食を共にして、産泰様に子授け及び安産を願った講である。

当八幡宮における碑は、明治１２年３月１０日に講が実施された折、建立されたものと思われる。

各所の産泰神社では、毎年４月１８日の例祭には、参拝者が「子供が安産で生まれますように」と願い、底のないヒシャクを奉納する行事が行われている。いわゆる安産を望む場合は、人が軽く抜ける（生まれる）という願いをこめて、底のぬけた柄杓を奉納するそうである。

そして、子宝を望む場合には、逆に底がある柄杓を奉納するとのこと。

江戸末期以降、子授け・安産を願う女性たちの間で、講が行われるようになり、各所に産泰神社の碑が分祀されるようになり、神社の例大祭の日には、十九夜塔、二十三夜塔等同様、女性たちがこの碑の周囲に集まって飲食を共にして、子授け及び安産を願ったとのことである。

産泰大神碑

（３）天神社

天神とはもともとは天の神（雷神）で、「日照りの続く時には天神に祈願すれば必ず雨が降る」と言われるように、天神社は、雨乞い祈願の天神信仰により創建されたものである。

管原道真の怨念が、天神（雷神）となり、京の都を襲ったことから、朝廷は、その怨念を鎮めるため、天歴元年(947)に北野天神社を建立し、菅原道真に「北野天満宮天神」の称号を与えた。いわゆる天神様の誕生である。

天神様は、本来祟り封じの神であったが、道真が優れた学者であったことから、学問の神へ変わっていった。

須影八幡宮の天神社は、雨乞いか、祟り封じか、学問成就か。

（４）稲荷社

稲荷社には、神道系と仏教系がある。

神道系は、京都市伊奈利山に鎮座する伏見稲荷大社を総本社とするもので、朱の鳥居と白い狐がシンボルとなっている。祭神は、宇迦之御魂神等を祀る。食物神、農業神、屋敷神として祀られている。

仏教系は、愛知県豊川市にある曹洞宗の円福山豊川閣妙厳寺を本山としており、境内に祀られている稲荷神社（祭神：荼枳尼天）が有名となり、豊川稲荷と呼ばれるようになり、商売繁盛の神として祀られている。

（５）月山神社

出羽三山（月山・湯殿山・羽黒山）信仰の一環で、特に月山神の本地仏が八幡神と同じ阿弥陀如来であるところから、月山神社が祀られたのであろう。現在の月山神社の祭神は、神仏分離により、八幡神とならず、月山にちなみ月読命となっている。